

第412回 春季例祭

大野湊神社神事能

令和5年5月15日

寺中の杜芸能祭

●大野湊神社は、神龜4年（727）東北陸奥の人、佐那（さな・人名）が舟旅に出て航海中に、海辺の大野庄真砂山竿林（おおのしょうまさこ）やまさおのはやし・現在の金石海岸付近）にさし掛かった時、浜から笛の音が聞こえるので丘に上がつてみると既に神明社があった。佐那はそばに祠（大野湊神社）を建てた。（現在の海の中。海岸が浸食され、数回場所を移動している）

●神事能の起源は古く、大野湊神社に伝わる古文書には、七尾の小丸山城から居城を金沢へ移した前田利家が、天正十四年（一五八六）に朽ち果てた大野湊神社再興のため、田地二町を寄進した。宮越（金石）村をはじめ近在の十五の村々を産子と定め、戦乱のために荒れ果てた大野湊神社を復興し、その祭礼も復活させた。神前に奉納されていた舞楽もこの時復活された。

●加賀藩の二代藩主前田利長が、一六〇〇年（慶長五年）に関ヶ原の合戦で勝利し、その報奨として、一六〇四年（慶弔九年）、小松辺りに居た室橋太夫という能役者に命じて、神事能を行わせて以来、今日まで四百年以上にわたり。（戦争などで中断した時を除く）毎年奉納されています。現在は金沢能楽会と大野湊神社神事能奉賛会・金石宝生会の会員が共演しています。

●今年は能「花月」、舞囃子「西王母」、狂言「鐘の音」をはじめ、素謡「岩船」「雲雀山」「仕舞」「羽衣ウセ」「簀」が奉納され、能の囃子方、地謡は袴（かみしも）を着けて勤め、演能の前に舞台から拝殿に拝礼します。

●二〇〇九年（平成二十一年）には第四百回を迎え、新しくなった総檜の舞台で記念能として、一六〇四年の第一回の番組と同じ「翁、高砂、田村、熊野、三輪、狸々（せいせい）犬の吠える声」が素謡と能で奉納された。（神社案内文参照）

狂言「鐘の音」

成長した息子の元服祝いに、黄金（こがね）造りの太刀（たち）を贈ろうと思った父親が、家来の太郎冠者（召使いの若者）を「金の値（金のうち・金のねだん）を聞いてこい」と鎌倉へ使いに命じます。お金の値を鐘の音と勘違いした冠者は鎌倉の寺々を廻り歩き、鐘楼（しやうろう）の鐘をついて音色（ねいろ）を聞き比べ帰宅すると、主人の前で鐘の音を報告します。主人は寝めるどころか怒りだします。その訳を聞くと……

主人の怒りを解くため、鎌倉の寺々を回った様子を、謡い舞うのが見どころの狂言で、寿福寺、円覚寺、極楽寺、建長寺の鐘をつくし「べん」と鐘の音の擬音（鐘の音のまね）を演者自身の声で表現するところが面白く見どころです。



能「花月」

七歳の子を見失ったことから僧になり、我が子を探しに都の清水寺に行くと、花月と名の少年がいた。花月は、皆と小歌を楽しんだり、花の枝に止っているウグイスを弓でねらったり、清水寺縁起の曲舞を舞ったりして興じていた。僧がよく見ると成長した我が子なので、対面を喜ぶ。

花月は門前の人との別れに舞い、幼時に天狗にさらわれて諸国の山々を巡った思い出を物語った末、父に伴われて修行の旅に出る。

親子再会物だが、内容的には芸尽しの能で、見せ場が多い。少年の無邪気な様子を浮き立たせた古作で小歌も拍子扱いが見どころ。



今、森が動き出す 寺中の杜 芸能祭

